

# 中世歌論と江西詩派

## —— 黄山谷の詩風 ——

石 原 清 志

一

中世歌論は中世文学論の中核をなすものであり、それは王朝末期の幽玄の歌人、藤原俊成の幽玄論を源流となすものであり、その展開は耕雲明魏や招月庵正徹等の歌論を経て、変遷転容の末に、中世後期の歌人、連歌師であり、篤信の仏教徒である心敬の文艺理論に至って穹隆に達するということ<sup>注①</sup>を、拙著『中世文学論の考究』において述べたところである。そのとき、中世前期の掉尾を飾るすぐれた歌論の書として耕雲明魏の著『耕雲口伝』を挙げて、それに投影している中国の詩風・詩論について述べておいたが、その際割愛した江西詩派の開祖と仰がれる黄山谷の詩の特質について卑見を述べてみたい。それが本稿において庶幾するところである。

二

『耕雲口伝』の本歌取様の事に、

古に此事なし。中古已来の事也。古今集の歌に、万葉集の歌と同様な歌のあるは、本歌の分にてはなし。唯万葉集のこはくしきをやはらげて、聞きよくなしたる也。さる程には、かる処もなく、さながら本の歌とひとしきも有るなり。此法詩家にもあり、黄山谷が点南の十絶は、白樂天が詩をとりて、あるひは三四字、或は一字二字なほせり。後学批判して樂天は比喩に長じ、山谷は剪裁に長ずといへり。今の世に本歌とるとはこれに異なり<sup>注③</sup>とある。この黄山谷は、十一世紀の中国の代表的詩人、黄庭堅（一〇四五—一一〇五）である。彼はその雅号山谷道人によってそう呼ばれているのである。彼は蘇軾（東坡）（一〇三六—一一〇一）と共に宋代を代表する詩人であり、中国文学史上最初の自覚的詩派といわれる江西派から始祖と仰がれた詩人である。『七百番歌合』の「序」や『耕雲口伝』を著述した耕雲明魏は南北朝期に、南風競わざる秋に南朝の柱石として内大臣の要職にあり、出家後帰洛して都に住み、北朝方の枢要人物達からも崇敬された人物である。彼は歌人としても数々の清冽な詠歌を残し、歌論の書としては、『七百番歌合』の「序」や『耕雲口伝』にすぐれた詠歌の理論を残している。彼の学



は和漢にわたって、深く、博く、精深な知識を有している。叙上の『耕雲口伝』の一節は、和歌の本歌取の変遷について述べた一部分である。耕雲明魏の中国の古典籍に関する学殖は深遠博大なものがあ、詩学・詩論は言うに及ばず、宋学の理論に通じ、経書に精しく、老莊の学に通じ、諸子百家に精通していたことは、『七百番歌合』の「序」及び『耕雲口伝』を見れば明らかである。彼は王朝期から中世期にかけて、この国に深甚な影響を与えた白樂天の詩風と江西詩派の始祖と仰がれた黄山谷の詩風とを上述の『耕雲口伝』の中で、「樂天は比喩に長じ、山谷は剪裁に長ず」と簡潔に言及しているのである。これは既に太田青丘氏が述べておられるように、<sup>注⑤</sup>中国の宋代詩論の書、嚴羽の『滄浪詩話』の三、山谷体、白樂天体、少陵体、太白体、韓昌黎体、柳子厚劉体、陶体、曹劉体、謝体の引用である。山谷体以外は前著に述べているので<sup>注⑥</sup>ここでは省筆するが、この宋代詩人の代表的人物の黄山谷の詩風について私見を述べ、次に、わが国の中世歌論に如何に投影したかについて考察することとする。

### 三

まず、黄山谷の生涯について瞥見しておく。黄山谷は、名は庭堅、字は魯直、号は涪翁、山谷道人と号した。仁宗の慶曆五年（一〇四五）六月十二日に分寧県（現在の江西省修水県）に生まれた。父は黄庶、母は李氏。その時、蘇軾十歳、蘇轍七歳、孫覿十八歳、李常、十九歳、謝景初は二十七歳であった。彼は皇祐三年（一〇五一）七

歳にして「牧童」の詩を作ったといわれている。至和二年（一〇五五）十一歳にして「送人赴峯」の詩を作った。嘉祐三年（一〇五八）十四歳の時、父庶が没した。嘉祐六年（一〇六一）十七歳の時、母の兄李常の許に遊学して孫覿と初めて対面した。嘉祐八年（一〇六三）官吏資格試験の地方予選にパスしたが、翌治平元年（一〇六四）礼部の試験に落第。治平三年（一〇六六）には地方予選を首席でパスし、翌治平四年（一〇六七）には進士第三甲に合格、汝州葉県の尉に任ぜられた。時に黄山谷は二十三歳。翌熙寧元年（一〇六八）孫覿の娘と結婚し、九月に汝州に到着したが、期限に遅れたために、知事富弼の命で吏の身分に降格された。熙寧三年（一〇七〇）葉県在任中に妻孫氏が二十歳の若さで病没した。熙寧五年（一〇七二）北京（大名府）国子監教授に任ぜられた。時に黄山谷は二十八歳。この年には歐陽修が没した。翌熙寧六年（一〇七三）謝景初の娘と再婚。この年に周敦頤が没した。熙寧九年（一〇七六）国子監教授に重任。翌熙寧十年（一〇七七）彼の生涯の師、蘇東坡が徐州の知事に着任した。この年に黄山谷は始めて蘇東坡の詩に次韻した（「次韻子瞻春菜」）。翌元豐元年（一〇七八）蘇東坡に詩を奉呈し、蘇東坡から賞賛の辞を受けた。翌元豐二年（一〇七九）後妻の謝氏が病没。翌元豐三年（一〇八〇）国子監教授の任期が終り、大和県事の辞令を受け、いったん帰郷。帰郷の途次、舒州三祖山・山谷寺の石牛洞に遊んだ。山谷道人のペンネームはここに由来する。元豐六年（一〇八三）監德平鎮に転任。元豐八年（一〇八五）秘書省校書郎に任命。時に黄山谷は四十一歳。この年の十二月に蘇東坡は起居舎人として中央に復帰した。翌元祐元年（一〇八六）神宗実録検討



官・集賢校理に任命。この年に、王安石・司馬光が没し、九月に蘇東坡が翰林学士となった。翌元祐二年（一〇八七）著作佐郎となった。元祐六年（一〇九一）母李氏が病没。服喪のために帰郷。元祐八年（一〇九三）国史院編修官に任命されたが、辞退。郷里分寧県に滞留。翌紹聖元年（一〇九四）管句亳州明道官となり、開封府界に居住を命ぜられた。この年の十一月、越州司理であった兄、大臨と共に、首都近郊に出頭し、訊問を受け、供述書を提出。神宗実録の中で新法を非難した罪により、涪州別駕・黔州安置を命ぜられた。この年に王安石の字説の採用禁止が解かれ、司馬光等の諡号が剝奪され、茫祖禹が黄山谷と同一罪状で永州へ流され、蘇東坡は惠州に、蘇轍は筠州へ流された。時に黄山谷は五十歳。翌紹聖二年（一〇九五）黔州到着。開元寺の摩周閣に居住。元符元年（一〇九八）戎州安置となり、戎州城南の任運堂に居住。元符三年（一一〇〇）五月に宣義郎・監鄂州在城塩税に発令され、十月には奉議郎・簽書定国軍節度判官庁公事に発令された。翌建中靖国元年（一一〇一）朝奉郎・権知舒州事に発令され、四月に荊州に到着。沙市に居住した。この年に吏部員外郎に発令されたが再度辞退し、太平州の知事を希望した。翌崇寧元年（一一〇二）六月に太平州知事に就任したが、九日後に免職。即日任地を発ち、九月に鄂州に到着。長江沿岸の都市を転々とした。彼は荊州滞在中に、承天禪院塔記を書いたが、これが筆禍事件の原因となった。翌崇寧二年（一一〇三）管句洪州玉隆觀となった。この年の四月に黄山谷の文集が禁書となった。十一月には、承天禪院塔記の中で、国政を非難したかどで宜州流罪の命を受けた。この年には、蘇東坡父子、秦觀、晁補之等の文集を

禁書とし、版木を焼けとの詔命が下った。翌崇寧三年（一一〇四）岳陽を経由して、宜州（現在の広西省宜山県）に到着。この年の十二月に兄、大臨が黄山谷を訪ねて宜州へ来訪している。翌崇寧四年（一一〇五）三月、黄山谷最後の弟子、范寥が山谷を慕って宜州に來訪した。九月三十日宜州の客舎で病没。時に黄山谷は六十一歳。彼の身の世話をし、最後に彼をみつた者は范寥一人のみであった。寂しい臨終であった。彼の生涯は決して華やかなものではなかった。新法党、旧法党の抗争の波にもまれ、彼は二度も流謫の憂目をみている。その終焉の地は京師をはるかに離れた僻遠の流謫の地であった。然し、彼の詩には自己の環境に対する泣きごとは見られない。それは彼の師、蘇軾と軌を一にする。彼は張耒、晁補之、秦觀と共に蘇門の四学士と呼ばれた。<sup>注⑦</sup> また、彼は師、蘇軾とあわせて蘇黄とも称せられた。唐代と宋代とは詩風が異なることは諸家の指摘するところであるが、彼が最も崇敬した唐代の詩人は杜甫であった。それは彼の師、蘇軾の失脚と共に、彼が四川省の黔州・戎州へ流謫された時、杜甫の四川流寓中の詩全部を書写し、石に刻したことが、「杜子美の巴蜀の詩を刻する序」と「大雅堂の記」を見れば明らかである。然し、彼の思想の内攻性は杜甫と共通する点はあるものの、本質はおのずと異なるものがある。<sup>注⑧</sup> 杜甫は内攻性を基盤としながらも、浪漫的感慨をうたい、黄山谷は、深く沈潜して措辞に苦辛し、彫琢に彫琢を重ねて、人間性の本質を追求している。そのために彼の詩は時として、読む人に晦渋の感を与えるような詩作をすることが往々ある。その基底に彼は詩想の基盤に道家的思想を持つからである。また、彼は仏教的（禪的）思想をも内包している。ここ



に宋学を背景とした江西派の開祖と仰がれる黄山谷の特徴が見られるのである。

#### 四

次に、黄山谷の詩風の特徴を検討する。まず、黄山谷の十六歳の時の詩を記す。

#### 溪上吟 并序

春山鳥啼、新雨天霽。汀草怒長、竹篠交陰。黃子觀漁於塘下、尋春于小桃源。從以溪童稚子哇丁三四輩。茶鼎酒瓢、淵明詩篇、雖不命戒、未嘗不取諸左右。臨滄波、弘白石詠淵明詩數篇。清風為我吹衣、好鳥為我勸飲。當其濯然無所拘係、而依規矩準繩之間、自由佳處。乃知白蓮社中人、不達淵明詩意者多矣。過酒肆則飲。亦無量也。然未始甚醉。蓋其所寓、與畢卓劉伶輩同、而自謂所得、與二子異。人亦殊未能知之也。酒酣、得紙書之、為溪上吟。

#### 谷川のほとりの歌 並びに序

春の山々に鳥は楽しくさえずり、新しく降りそそいだ雨に洗われ、空は一面に晴れ渡った。谷川の汀の草は潑刺として勢よく伸びて行き、竹と篠は交々陰を作っている。黄さん（黄山谷）は堤の下、川魚を眺めやりながら、春の景色を小さな桃源境に尋ねて行

く。お供に従えて行く者達は、少年の召使やおさな子、園丁などの三四人。茶釜や酒入りのふくべは勿論のこと、陶淵明の詩篇はいうまでもなく、身辺からはなしたことはない。まず、谷川の清らかな青い波を見下して、白い石のほこりを払って静かに坐り、陶淵明の詩篇を数篇口ずさんだ。さわやかな風は私のために我が衣に吹き寄せ、美しい鳥は私のためにうま酒を飲めと歌いかける。このように何物にもとらわれない自由な時に至って思うに、世の常のならわしの中に在っても、おのずから佳き処はあるものだ。そこで高僧慧遠のような白蓮社の人々でも陶淵明の詩情あふれる心には達していない人々が多いのだと解るのだ。酒店があればすぐ立ち寄って酒を呑む。量などは問題にしないのだ。然し、まだ一度だって酒に酔いつぶれたことはない。酒好きな点は大酒呑の畢卓や劉伶などと同じだが、自ら思うことは、わが得る所は畢・劉二代とは異なるのだ。他人にはこの私の気持などは解りはしない。酒もたけなわとなり、紙をもらって書きつけたものを、谷川のほとりの歌とするのである。

#### 短生無長期

人生は短かく、永遠に生きたいのだから、

#### 聊暇日婆婆

いさか暇をぬすんでのんびりとしてみるのだ。

#### 出門望高丘

門を出て高い丘を眺めやると、

#### 拱木漫春蘿

墓地の樹木にはつる草がいっぱい。

#### 試為省鬼錄

ために過去帖を繰ってみれば、

#### 不飲死者多

酒を飲まない者に死者が多い。

#### 安能如南山

どうして人間が南山の如くに、



千歳保不磨 千歳不変の生命を保ち得よう。

在世崇名節 俗世に生きれば名節を尊ぶが、

飄如赴燭蛾 はかないことは飛んで火に入る蛾のようだ。

及汝知悔時 君が後悔する時は、

不事蓬一窠 万事が一株のよもぎのようだ。

青青陵陂麥 青々とした丘陵には麦があり、

妍暖亦已花 あでやかに暖く花もまた已に開花している。

長煙淡平川 たなびく霞は平原の川にうつすらとかかり、

輕風不為波 そよ吹く風は波も立てぬ。

無人按律呂 樂器をやつる人もいない。

好鳥自和歌 好鳥は自ら歌を合唱している。

杖藜山中帰 私が藜杖をついて山中から帰れば、

牛羊在坡陀 牛や羊は勝手に坂道に散らばっている。

本自無廊廟 私は元来廟堂に立とうなどと思ってもいない。

政爾樂澗阿 まさに自然の中で自由を樂しむだけだ。

念者揚子雲 今しみじみと漢代の學者揚雄を憶う。

刻意師孟軻 彼は刻苦して孟子を繼ごうとした。

狂夫移九鼎 狂人が政權を奪った時でも、

深巷考四科 巷の陽で儒教の四徳目を考えていた。

亦有好事人 然し、また物好きな人もあった。

時能載酒過 時にはよく酒持參で訪れてくれた。

無疑拳爾酒 遠慮せずにお前の酒で盃を挙げよう。

定知我為何 きつと私が何者かが解るであろう。

この詩は明代の刊本、『山谷全書』によれば、山谷の十六歳の時の詩と伝えている。序、七十一言、詩三十行、百五十言の長詩である。一瞥しただけでも、陶淵明を引き、莊子の語彙を引き白蓮社を引き、竹林の七賢の一人、劉伶を引き、晋書、漢書等を引用して、博引傍証振りを發揮している。驚く可き早熟の天才ともいうべきイメージを強く感じる。この詩にはまた、仏教と道教を重層して、その上に立つ諦觀ともいうべき人生觀をうかがうこともできる。この詩には自然觀照にも脱俗的風尚ともいうべき隱者的精神もうかがうことができる。若き日の黄山谷の主體的精神をうたったすぐれた詩といつてよからうと考えられる。

次に、黄山谷が生涯の師と仰いだ蘇軾（東坡）と師弟の契りを結ぶ契機となつた山谷三十四歳の時の詩を記す。（後詩は蘇軾を松にたとえた詩であるが、ここでは省略する。）

### 古風二首上蘇子瞻 蘇軾先生に奉る古風の詩二首

#### 其一 そのうちの一首

江梅有佳実 南方長江の辺の梅に佳き実がなり、

託根桃李場 北方の桃や李の園に植えられた。

桃李終不言 桃や李は何も言わぬが、

朝露借恩光 梅の木には朝露が太陽の恵をかりて輝いた。

孤芳忌皎潔 ひとり咲く花はその皎潔さを嫌われて、

冰雪空自香 氷や雪のような白さが空しく香るばかり、

古来和鼎実 古来、鼎の中の正餐の調味のために、



此物升廟廊 この梅は公的な場に用いられた。

歲月坐成晚 年はいっしか暮れて行き、

煙雨青已黃 長雨の中で青い葉は黄に色づいた。

得升桃李盤 桃李を盛った皿に入れられて、

以遠初見嘗 遠来のもののゆえに初めはすこし味あわれたが、

終然不可口 ついに北方の貴人の口にあわず、

擲置官道傍 大道の傍に空しく捨てられてしまった。

但使本根在 然し、ただ元の根さえしつかりしていれば、

棄捐果何傷 棄てられてもどうして心を痛ましめることがあろうか。

この十六行八十言の古風な詩は、元豐元年二月の作。山谷は鄭重な書簡を添えてこの詩を蘇東坡に贈った。蘇東坡はそれに対して極めて好意的な高い評価をした返書を送った。これが師弟の縁を結ぶきっかけであった。事実彼の詩は蘇東坡の称賛に価する勝れた詩である。すなわち、桃李にこと寄せて、当時の政權を把握していた新法黨を諷し、江梅に蘇東坡を寓して、俗悪の世には容れられずとも、蘇東坡を正論の士として賛美しているのである。第三句の「桃李終不言」は『漢書』の「李広賛」をふまえているし、第七句の「古来和鼎実」は『尚書』の「説明篇」の下をふまえ、第十四句の「擲置官道傍」は竹林の七賢の一人、王戎の故事を引いている『世説新語』をふまえて、正論の士、蘇東坡の不遇を暗示している。古典籍や故事を下敷にし、現実の事象を上敷として蘇東坡を崇敬する念を内に秘めて、自己の心情を見事に表白している詩といえるであろう。

次に、黄山谷の詩集中では最も著名な長詩、「演雅」について記す。

この詩は元豐四年、黄山谷三十七歳の時の作である。

## 演雅

動物百態の意味づけ 注⑨

桑蚕作繭自纏裏 桑を食して蚕は自纏自縛する。

蛛蝥結網工遮邏 蜘蛛は網を張って巧みに他をとらえる。

燕無居舍終始忙 燕は家が無いので家を造るのに大忙し。

蝶為風光勾引破 蝶は風と光にすっかり魅惑されてしまう。

老鶻銜石宿水飲 老鶻名鶻は石をくわえて巢に水をためて飲んでゐる。

穉蜂趨衛供蜜課 若い蜂共はせつせと税金を役所へ運ぶ。

鵲伝吉語安得閑 鵲は吉い知らせで忙しく休む暇もない。

鷄催晨興不敢臥 鷄は早起きでゆつくりと寝られない。

氣陵千里蠅付驢 意気込みは千里を超える驢馬にくつついて、蠅はついて行く。

枉過一生蟻施磨 蟻は一生の間、左へ廻る臼の上で空しく、右へ右へと廻るの

蠹聞湯沸尚血食 しらみは湯のたぎるのを聞いて自分の生命の危機も知らずに

雀喜宮成自相質 雀は立派な御殿の完成を喜んでひとりで祝う。

晴天振羽樂蜉蝣 晴天の下で蜉蝣は羽を振って樂しげに舞う。

空穴祝児成螺贏 土蜂は空穴の中で青虫にわが子になるようにまじないをして

蛞蝓<sup>⑩</sup>転丸賤蘇合 蛞蝓は玉をころがして、蘇合香をいやしめる。

飛蛾赴燭甘死禍 飛蛾は灯火を慕って死を甘受する。本当に飛んで火に入る夏の虫だ。

井辺喜李蟠苦肥 木喰い虫は井戸の辺の李を喰い荒して肥え太って苦しそう。

枝頭飲露蟬常餓 枝の上で露を飲むばかりで蟬はいつも腹ペコ。

天蟻<sup>⑪</sup>伏隙録人語 天蟻は隙間にひそんで人の話を記録する。

射工含沙須影過 射工虫は砂を口に含んで人影の通過を待つて危害を加えようとする。



訓孤啄屋真行怪

蠨蛸<sup>⑫</sup>報喜太多可

鷓鴣密伺魚蝦便

白鷺不禁塵土流

絡緯<sup>⑬</sup>何嘗省機織

布穀未應勤種播

五枝鼯鼠笑鳩拙

百足馬蛇憐鼃跛

老蚌胎中珠是賊

醯雞<sup>⑭</sup>瓮裏天幾大

螳螂<sup>⑮</sup>當轍恃長臂

熠燿<sup>⑯</sup>宵行矜照火

提壺<sup>⑰</sup>猶能勸沽酒

黃口只知貧飯顆

伯勞饒舌世不問

鸚鵡<sup>⑱</sup>纔言便閉鎖

春蛙夏蜩更嘈雜

土蚓壁蟬何碎瑣

江南野水碧於天

中有狎鷗閑似我

木菟は訓孤と鳴いて屋上でついばみ、何やらあやしげだ。

あしだか蜘蛛は、吉事を知らせ、大概のことは結構でござい  
ますという。

鷓鴣はひそかに魚に対してチャンスをねらっている。

白鷺は泥にまみれてどうにもならぬ。

せわしげに機織るように鳴くきりぎりすは、機織りをしたこと  
があつたのか？

ほととぎすは種をまけと鳴くというが、自分では種まきをし  
たことはないだろう。

器用なだけで何をしても中途半端なむささびは鳩は何もでき  
ないと笑っている。

百本足のやすでは早く走れないために、びつこのすっぽんを  
羨んでいる。

年老いたはまぐりには自分の体内真珠が害になる

小さな虫には自分の住む酒瓶が広大な天地なのだ。

かまきりは長い腕を頼りにして車道に立ちふさがる。

螢は夜になって現われて、輝く光を放つために威張っている。

提壺という鳥は名の通り、しきりに酒を買えとすすめている。

くちばしの黄色い小雀はただ飯つぶをむさぼるだけだ。

百舌はしゃべりまくっても世間からは問題にされぬ。

鸚鵡はわずかにものをいうが、それだからすぐつかまって閉じ  
こめられてしまうのだ。

春の蛙と夏の蟬は更にやかましいだけで、何をいうのかさつ  
ぱり解らぬ。

土の中のみみずと壁の紙魚の声はひどくかすかで解りにくい。

江南の平野の水は蒼天よりも青い。

その中で悠々自適の私に似たものは私に狎れた鷗のみだ。

この四十行、二百八十言の長詩は元豊四年の作。この詩のテーマ  
に注したように、演雅とは『爾雅』を演繹し、敷衍したものという  
意である。『爾雅』は中国古代の周の時代の周公旦の作と伝えられ

ているが、それは信憑性を疑われている。然し、漢代以後の十三經

の一に数えられている。この書は、天文・地理・音楽・器材・草木・

鳥獸の各項目にわたる百科事典的の字書である。演雅は、語義からい

うと『爾雅』の鳥獸の項の解説ということになるが、この詩は単な

る釈義ではない。黄山谷は歴史的伝統的基盤に立つて、それぞれの

意味づけを行っているのである。ここに我々は主知的詩人であり古

典主義の詩人である黄山谷の特徴を如実に見ることができるのであ

る。まず、第一句は、白樂天の「江州赴忠州至江陵以来舟中示舍弟

五十韻」をふまえており、第二句は、後漢の王充の『論衡』の「幸

遇篇」を引き、第三句は、『詩經』の「大雅・靈台」の語彙を引用し

ている。それ以後にも、『埤雅』『列子』『淮南子』『晋書』『後漢書』

『搜神記』『孔子家語』『孟子』等々から結句の『列子』、杜甫の「旅

夜書懷」に至るまで、全篇にわたって縦横に古典籍を引用して詩作

している。それらの中で、『詩經』『莊子』の頻用が注目される。こ

れは彼の中国古典に対する深遠な学殖を端的に示すものである。こ

の詩の最後の結句においては、悠々自適の自己の心情を親しい鷗に

比して全詩の結びとしている。それは彼の思想的基盤を示すと共に、

決して幸福であつたといえない彼の人生観をも示すものである。

この詩を熟読する時に、単なる鳥獸の実態描写のみにとどまらず、

彼の鳥獸に対する精緻な観察と共に、彼の豊かな人間性が感得でき

るのである。それは彼が二十四孝の一人に挙げられている所以でも

あろう。

次に、黄山谷の晩年の詩の一つである「武昌松風閣」の詩を記す。  
時に黄山谷は五十八歳。



武昌松風閣

武昌の松風閣での感懐

依山築閣見平川  
夜闌箕斗挿屋椽  
我来名之意適然

山に依つてこの松風閣は築かれ、平原の中の長江が眺められる。夜がふけると南箕・南斗の星座が軒先につきささるように眺められる。私は此処に来て、この高閣に松風閣と名づけたが、その名は実にぴつたりだ。

老松魁梧數百年

此処の老松の壮大なことは數百年を経ているのである。

斧斤所敎今參天

斧斤に切られることもなく、生長して天に交る位の高さである。

風鳴鳩皇五十絃

松風は太古の女神鳩皇の五十絃の楽器のように鳴り響き、

洗耳不須菩薩泉

その清音に洗われて、菩薩泉で耳を洗う必要もない。

嘉二三子甚好賢

二・三の諸君が先賢を心から好む気持は素晴らしい。

力貧買酒醉此筵

貧しい中から酒を求めて、この筵席で楽しく酔おうではないか。

夜雨鳴廊到曉懸

夜の雨が回廊に鳴り響き、明け方まで続いた。

相看不歸臥僧氈

お互いに顔を見合せて帰るのを止め、寺僧の毛布を借りて寝た。

泉枯石燥復潺湲

泉は枯れ石は乾いていたが、夜来の雨でまたさらさらと流れ始めた。

山川光輝為我妍

山と川とは生氣をとりもどして私のために光り輝やき、美しくよそおった。

野僧早飢不能饒

山奥の僧は早天のために粥もすることができず、

曉見寒谿有炊煙

空しく明け方の寒谿のあたりの朝餼の煙を見るばかり。

東坡道人已沈泉

敬愛する東坡先生はもはや黄泉の客となつてしまわれた。

張侯何時到眼前

詩友張朱君は何時になつたらわが眼前に現われてくることやら。

釣台驚濤可昼眠

釣台では濤の音を聞きながら悠々と昼寝をしたいし、

怡亭看篆蚊龍纏

怡亭では有名な竜が身をくねらせているような篆書も見たいものだ。

安得此身脱拘攣

然しどうすれば私はこの俗世の拘束から逃れることができ、

舟載諸友長周旋

気の合った友人達と舟に乗つてとこしえに交遊を続けることができようか。

この二十二行、百五十四言の詩は崇寧元年の作。山谷は当時、管句洪州玉隆觀という道教寺院を管理するという名目だけの閑職で、

江州から鄂州へ向う途中であつた。この武昌の地は現在の湖北省鄂城縣であり、松風閣は武昌の西方約一・七kmの揚子江の南岸に立つ西山の西山寺境内の松林の中にあつた建物で、松風閣の命名者は黄山谷である。この作品は「松風閣詩卷」として山谷の直筆が現存する。<sup>注10</sup>

この時は新法党が勢力を占めていた時代で、旧法党の彼の師蘇東坡は今や亡き数に入り、詩友、張朱も遠く離れた地に居り、山谷の寂寥感に心に深く憂愁の影となつていた時であるが、この詩には陰湿な泣きごとは歌われていない。清冽な自然と高邁な隱士の風格が漂う詩である。これも山谷の詩の一つの特徴であろう。

次に、黄山谷の没年の詩を記す。この詩は崇寧四年二月六日の作。この前年の崇寧三年に山谷は終焉の地宜州へ来た。然し家族を永州に残して単身で赴任していた。その年の十二月二十七日に彼の長兄、大臨が宜州に山谷を訪れて、一ヶ月余り滞在した。この兄が帰国するに際して、山谷は兄を十八里津まで送り、宜陽で送別の宴を開いた。その離別の詩がこれである。

宜陽別元明用觴字韻

宜陽で兄、元明に別れた時觴字の韻を用いた。

霜須八十期同老

兄上よ、共に鬚に霜の置く八十歳まで生き長らえて、

酌我仙人九醞觴

九回もかもしかえて出来た仙人の酒を私と共に酌みましょ

明月湾頭老松大

私達の故郷の明月湾のほとりの老松はさぞ大きくなり、

永思堂下草荒涼

永思堂のほとりの雑草は生え放題でさぞ荒涼としていることでしょう。



千林風雨鶯求友  
萬里雲天雁斷行  
別夜不眠聽鼠齧  
非閑春茗攪枯腸

あちらこちらの林では、風は吹きすぎ、雨は降りしきり、鶯は友を求めて鳴き叫び、  
萬里も広がる雲と空の中で飛ぶ雁の兄弟の列はとだえていま  
兄上と別れた夜は眼がさえて眠れず、鼠が物をかじる音を聞き入っています。  
春の新茶が枯木のような私の腸をかき乱して眠れぬのではありません。

元明は兄、大臨の字である。この兄と山谷は特に親しく、澤郷県の知事であった兄、大臨もまた山谷を愛し、山谷が黔州へ流謫された時は同行して、山谷を慰め、数ヶ月滞在して別れを惜んだ。その時、去るに当って觴の字を脚韻に用いて作詩した。その時、山谷もまた、元明の「黔南贈別」の詩に和した。後年（崇寧元年）山谷は新喻から兄、大臨へ、往事を回顧して、觴の字を脚韻とする詩を贈っている。ここでまた觴の字の脚韻を用いて作詩することは、長兄大臨との懐旧・惜別の情を胸に秘めてうたっているのである。この八行、五十六字の詩にも、『詩経』の「小雅」や唐代の詩人、劉禹錫<sup>注⑭</sup>や盧仝<sup>注⑮</sup>の詩を援用して兄弟愛をうたっているのである。この詩では山谷は兄と共に長寿を保ち、また再会の機を望んでいるが、再会の機はついに無かったのである。この年の九月三十日は彼は宜州の宿舎で淋しく六十一年の生涯を閉じたのである。

## 五

以上、黄山谷の詩を重点的に抽出して考察したが、次に前述の耕雲明魏が「耕雲口伝」の中で引用している「黔南十絶」<sup>注⑯</sup>について考察することとする。黄山谷集卷第十二の「黔南十首」を原典より抽

出すれば、次の通りである。

### 謫居黔南十首 流謫の地黔南で詠んだ十首

相望六千里  
天地隔江山  
十書九不到  
何用一開顏

僻遠の地、此処黔州からはるかに離れた故郷江西を望めば、六千里も離れている。  
天地は広大であるが、幾多の山河がその間を隔てている。  
此処僻陋の地黔州へは十の音信のうち九は届かない。  
そのために、一度も故郷からの音信で顔をほころばせることはないのだ。

### 其二

霜降水反絃  
風落木歸山  
冉々歲華脱  
昆虫皆閉關

霜が降り谷川の水が氷る冬となった。  
風が冷たく烈しく吹くために、木の葉はことごとく落ちて山の土に帰した。  
静かに時は過ぎて行き、今年も年の暮となった。  
あらゆる虫どもは冬のきびしさを避けるために戸を閉じて冬眠してしまつたのだ。

### 其三

冷淡病心情  
喧和好時節  
故園音信絶  
遠郡親賓絶

冬の寒い頃は、心も冷え冷えとしてまるで病人の心のようにであった。  
温暖な春がめぐつてくると、好天の良き日和の続く時節となった。  
然し、遠く離れた故郷からの音信は全く絶えてしまつた。  
遠く離れた土地に居る親戚や朋友からも音信は全く絶えて寂しいことだ。



其四

山郭灯火稀

山里は夜となつても灯火は稀で寂しく、

峽天星漢少

山峽の地から天空を望めば空にまたたく星影もすくない。

年光東流水

光陰は矢の如く、東流する水の如くに流れ去つて行く。

生計南枝鳥

私は流鶯の地に在つて故郷を恋しく思いながらも寂しく暮していることだ。

其五

宜懷齊遠近

莊子のいう如く、世間知を捨てれば是非彼我を忘れ、遠近を齊しとするし、

委順隨南北

身を運命にゆだねれば、南北何処に居ろうとも、これも運命のまま。

歸去誠可憐

仮住いに帰れば、世間からは気の毒と思われようとも、

天涯住亦得

流転のはてに天涯に住むのもまた私はこれも運命としてよしとするのだ。

其六

老色日上面

わが老の色は日に日にわが顔色に現われて、老化はすすむ。

歡悰日去心

喜怒哀楽の情は日に日にわが心を去つて行く。

今既不如昔

一切を遠観すれば今日は昨日に及ばぬ。

後当不如今

来るべき日も今日に及ばぬだろう。それゆえ今日を大切にすることだ。

其七

晴々雀引雛

雀はしきりに声を張り上げてさえずり、雛を呼び寄せる。

梢々筆成竹

風はさわさわと音を立てて、筍は生長して竹となつて行く。

時物感人情

このようなことにわが心は感じて懐旧の情が湧きおこってくる。

憶我故鄉曲

思いは遠く故郷に及び、わが故郷の楽曲をしみじみと懐しむことだ。

其八

苦雨初入梅

長雨が降り続きようやく梅雨の候となった。

瘴雲稍含毒

雨期に入ったために不気味な雲はやや毒気を含んできた。

泥秧水畦稻

泥の中には苗があり、水をたたえた水田には稲が育っている。

灰種畚田粟

灰を肥料としてまき、よく耕された田には、粟がすくすくと育っている。

其九

輕紗一幅巾

我家には軽い薄衣と一枚のカーテンがあり、

小簾六尺床

細かく編んだ竹の簾を敷いた六尺の寝台があるばかり。

無客尽日靜

この簡素な我家には終日来客とでもなく、ひっそりと静かなものだ。

有風終夜涼

だが、夜に入れば夜もすがら涼風が吹き夜毎に涼しく爽やかな日々が続く。



其十

病人多夢医

病人の多くは夢にまで医師を頼るものだ。

囚人多夢赦

囚人の多くは大赦令を夢にまで見るものだ。

如何春來夢

だが、私はどうしたことであろうか、この春以来、夢に見ることは、

合眼在郷杜

眼を閉じると懐しい故郷の村のことばかりだ。

まず、最初の第一首は、流謫の地、黔南が如何にわが故郷、分寧から遠隔の地であるかという詠嘆と、その地が僻遠の地なるがゆえに、故郷からの音信も殆んどわが手許には届かない。そのために、わが心も憂愁の悲しみを去って破顔微笑する時もないという流謫地、黔南に到着頃の心情の表白である。第二首は、黔南到着後の晩秋から冬の到来を自然景象の変化のうちに認めて、客観的にその風景をうたっている。第三首は、黔南の冬が去り、春の好季となっても、郷里からの音信は全くと絶え、親戚朋友からの連絡もまたと絶えてしまったという孤独感をかみしめている。第四首は、山間の僻地の小村では、いかにわびしく、また淋しいかという叙述と共に、時の流れの中に、諦観ともいふべき心理を蔵して、懐郷の意識はあるものの、流謫の地、黔南で生活することも運命と観じているようである。この詩には莊子の人生観が著く投影していることが看取できる。第五首は、莊子の人生観を基盤として、俗世の中から特立すれば、一身を運命にゆだねる時、俗世間からは憐愍の眼で見られても、天涯の地黔南に住むこともまた、それなりに可しとするという

のである。ここには道教的な超俗的世界を志向する精神が窺われる。第六首は、わが老化が進むと共に、俗界の俗事にわが心がゆれ動くことも少なくなっていく。悠久の時の流れの中で、一切を達観すれば、現在に如くものはなし、という道家的人生観をもって自己を凝視しているのである。第七首は、雛を呼ぶ雀のさえずりや竹の生長という自己の周辺の生活環境をあるがままに受け入れると共に、その生活感情に触発されて思ひは遙かな故郷に及んで、故郷の樂曲を懐しむという心情の披瀝であり、第八首は、梅雨期になり、陰鬱な天候の中にも、苗、稲、粟等の穀物の生長するさまをうたっている。辺境黔南の田園風景を叙している。謫居という意にそわぬ生活ながら、田園風景に眼を向ける心の余裕を感じさせる詩である。第九首は、粗末な住居の状態と、静穏な日常とを叙して、淡々とした隱者の如き、超俗の生活をうたい、第十首では、病人、囚人の最も希望するものを例に挙げて、自己のみはこの春以来、故郷の村ばかりを夢みることをうたっている。この黔南十首には、山谷自身の純粹な詩情の流露を見ることができよう。すなわち、この十首には一貫して郷愁の慕情が流れているが、四季の移り変りと共に、山谷の心情に微妙な変化が窺われる。山谷は五言絶句という形式の短詩形のうちに、自己の感懐の吐露を中心として四季さまざまな黔南周辺の自然景象を簡潔にうたい上げているのである。この十首を通じて感得できるものは、まず第一に郷愁であるが、その郷愁は清冽であり、陰湿ではない。また、黄詩の特徴の一つである一首の脈絡の不充分さ、換言すれば唐突とも思われるような詩句間の断層の如き展開はこの十首の中にも見られるものの、それらも熟読すれば深層



においてはつながっているものであり、それは荘子の影響が顕著であることを示すものである。山谷の詩の表現の簡潔は深い余情となつて読む者の心を搏つエトパスを持つ。これが主知的詩人、黄山谷の詩風の特質である。それは哲学的傾向を示すがゆえに、読者に時として難解という感を与えることは否めない。それは彼の詩に窺える無為自然を基盤とする老荘の思想が存在するからである。また、彼の詩には臨済禅の思想が深く投影しているからである。<sup>注20</sup>それはまた、唐代の抒情的浪漫的詩風とは自ずと異つた詩風を示すものである。黄詩の基盤が宋学の理念を基底に持つと共に、古典主義に立脚しているからである。それは江西詩派の始祖と仰がれる所以ともなるものである。それはまた、黔南十首にも端的に現われている。すなわち、黔南十首に展開する詠詩対象に対する山谷の詩情の発現の展開を見れば首肯せられるところである。冒頭の第一首・第二首の辺境僻陋の地、黔南に対する詠嘆から四季折々の自然の変化に眼を向けると共に、末尾に及ぶに従つて、郷愁は一貫した詩情となつて流露しているものの、次第に閑寂枯淡な隠者の如き心情に変化しているのである。その基底には老荘思想と古典主義が在るのである。我々はこの黔南十首のうちにも山谷の詩の特質を見ることができるのである。

また、山谷の主知的古典主義はこの黔南十首にも明らかに現われることができる。それを次に記すと、第四首の転句において、「年光東流水」とうたっているが、これは南唐の後主李煜の詩、「胭脂淚」の「自是人生長恨水長東」や「虞美人」の「恰似一江春水向東流」を引いており、<sup>注21</sup>悲劇の君主、李煜の悲歌を引いて素漠とした山村風

景に託して謫居のわびしさを述べている。また、第四首の結句の「生計南枝鳥」は、「文選」の「越鳥巢南枝」<sup>注22</sup>を原拠として懷郷の孤愁を詠じている。この第四首の結句の冒頭の「生計」はやや唐突の感なきにしもあらずとも思われるが、この語を必然性、自己の生活と解するなら、転句を裏付ける詠嘆と受容されよう。第五首の起句・承句の「宜懷齊遠近、委順隨南北」は俗界の世間知を捨てて運命に身をゆだねるという意であり、荘子の思想が顕著である。<sup>注23</sup>また、転句の「歸去誠可憐」の「怜」は「愛」とも「憐」とも解釈できるが、筆者は一首全体の内容から「憐」と解釈した。第八首の結句の「仄種畚田粟」の「畚田」は「易經」に由来し、「説文」「旧唐書」に引かれてある語であり、開墾されて二年乃至三年の治田を意味する。末尾の第十首の結句の「合眼在郷社」の「郷社」は「左伝」「周礼」の引用である。<sup>注24</sup>このように、山谷は絶句十首のうちに、古詩・古典籍を縦横に引用している。ここにも彼の博学多識ぶりを窺うことができるのである。

## 六

黄山谷は前述したように、「耕雲口伝」の「本歌取様の事」に、「黄山谷が点南の十絶は、白樂天が詩をとりて、あるひは三四字、或は一字二字なほせり。後学批判して樂天は比喩に長じ、山谷は剪裁に長ずといへり」とあるが、これは耕雲明魏が「長恨歌」や「琵琶行」のような長篇にくりひろげられる白樂天の抒情精神の溢れる精細な叙述に対して、黔南十首に見られる黄山谷の簡潔にして深遠



な意を内包するすぐれた詩精神を称揚していると考えられる。それは心敬が「さ、めごと」の「末」の第四十三条<sup>注25</sup>において、白詩の「琵琶行」の第三十二行の「此時無聲勝有聲」を「感情なほざりならず」としてこの句を心魂にしみ透るほどの全身全靈的な感動として受容しているのと通じるところがある。心敬は、さび、しほり、ほそみ、くらゐ、しな、ゆふ、たけ、おもかげ等々の属性を包摂し、凝集した理念を艶として止揚しているが、これは近世の俳聖、芭蕉の、さび、しほり、ほそみに通じるものである。心敬が屢々中世の芭蕉と呼ばれる所以もここにある。芭蕉は「笈の小文」<sup>注26</sup>で、「黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ」といい、また、「養虫説跋」<sup>注27</sup>では、友人山口素堂の詩をほめて、「其詩や錦をぬひ物にし、其文やまろばすがごとし。つらくみれば、離騷のたくみ有に、たり。又、蘇新黄奇あり」と述べている。この蘇新は、蘇東坡の新風であり、黄奇は黄山谷の一見すれば、奇異、難解とも見られる主知的老莊的思想を基盤に、深く臨済禪に薫染した詩風をいうのである。これは芭蕉が深く黄山谷の詩を認識していたことの証でもある。なぜならば、この国の中世に受容され、知識人に愛読された魏慶之の『詩人玉屑』は寛永十六年に和刻本が刊行されているからである。また同書の先蹤をなす北宋の嚴羽の『滄浪詩話』には、元祐体をあげ、蘇黄陳諸公とし、次に江西宗派体をあげて、「山谷為之宗」としている<sup>注28</sup>。この書も中世の知識人に広く読まれた詩論書である。耕雲明魏は禪林の緇徒であり、博学多識の人であるから、当然この書も囑目していたであろう。それゆえ、彼は深く黄山谷の詩風に感銘を受けたことは想像に難くないところである。また心敬は篤信の仏教徒であり、

漢詩文を重視する歌人<sup>注29</sup>であり連歌師である。深く臨済禪に薫染した黄山谷の詩風は、清冷寒瘦を艶という精神美に結晶させた心敬の理念と深層において相通じるものを感得できるのである。然し、「さ、めごと」の本末両帖を通観する時黄山谷の名は見当らない。だが、両者の詩想、詩精神は相通じるものがあると考えて大過はなからうと思うのである。恩師、谷山茂先生が、「清風美とその展開」において、心敬における寒瘦清冷な清風美をもって中世的清風美の極致とみる<sup>注30</sup>、と記されたことを筆者はいみじき至言と考えるものである。この中世の極北を示す心敬の文芸論を含め広汎な中世文芸論に深く投影しているものが中国の唐宋期の詩と詩論であると筆者は考えるものである。それらの中で五山の禪林文芸を含めて室町期の歌論連歌論に深甚の影響を与えたものは江西詩派の始祖と仰がれる黄山谷の詩であると考えるのである。五山の禪林文芸に与えた黄山谷の影響については稿を改めることとする。

注記。黄山谷の詩集は底本に和刻本黄山谷集を使用した。ただし、漢字は通行の字体に改めたところがある。耕雲口伝は日本歌学大系。第五巻を使用した。

本稿の作成に当って、本田清博士の御懇篤な御教示を受けた。特記して深甚の謝意を表する次第である。

注

- ① 拙著。中世文学論の考究。本論。第一章。第二節。
- ② 點南十絶とあるが、原典によれば、黔南十首である。
- ③ 日本歌学大系。第五巻。耕雲口伝。



- ④ 応永二年。足利義詮邸の歌会。現存は序のみ。扶桑拾葉集所収。
- ⑤ 太田青丘著。日本歌学と中国詩学。中世篇。
- ⑥ 拙著。中世文学論の考究。第一章。第二節。
- ⑦ 南宋。呉曾著。呉復篇。能改齋漫録。説郭。第十六。所収。
- ⑧ 吉川幸次郎著。中国詩人選集。宋詩概説。
- ⑨ 雅は漢代の辞書、爾雅をさす。このテーマは単なる爾雅の釈義ではなく、内容の意義付けを行っているという荒井健氏の卓説が妥当であろう。
- ⑩ かぶと虫の一種。
- ⑪ 虫の名。螻蛄ともいう。おけらのこと。搜神記に見える。
- ⑫ 蜘蛛の一種。あしだかくも。西京雜記に見える。
- ⑬ 虫の名。きりぎりす科の虫。くだまき虫、こおろぎ、すずむしともいう。
- ⑭ 莊子。人間世篇。中国古典選。莊子。朝日新聞社刊。
- ⑮ 壺盧鳥ともいう。北宋時代の詩人、梅堯臣の四禽言に見える。
- ⑯ 中国詩人選集。二集。黄庭堅。卷頭口絵。
- ⑰ 劉禹錫。春晚联句。全唐詩。中華書局印行。
- ⑱ 盧仝。謝新茶。全唐詩。中華書局印行。
- ⑲ 黔州は現在の貴州省の古名。黔南は貴州省境に近い四川省の僻地。
- ⑳ 黄山谷の禪は臨済宗黄竜派。五灯会元には黄山谷を居士として、その名を列ねている。
- ㉑ 中国詩人選集。第十六卷。李煜。
- ㉒ 李善注。文選。古詩。十九首。商務印書館印行。
- ㉓ 莊子。齊物論。中国古典選。莊子。朝日新聞社刊。
- ㉔ 左伝に、二十五家を郷社というところ。ここでは郷村の意に解しておく。
- ㉕ 日本古典文学大系。連歌論集。俳論集。ささめごと。(末)。
- ㉖ 校本芭蕉全集。第六卷。紀行日記篇。俳文篇。角川書店刊。
- ㉗ 校本芭蕉全集。第六卷。紀行日記篇。俳文篇。角川書店刊。
- ㉘ 郭紹虞篇。滄浪詩話校釈。北京人民出版社刊。
- ㉙ 心敬集。論集。所々返答。第二状。吉昌社刊。
- ㉚ 谷山茂先生。谷山茂著作集。第一卷。第四章。一。角川書店刊。